

〔翻 刻〕

『下野州岩舩山緣起』（全一卷）

01 下野州岩舩山緣起

夫當山開闢者仁王四十九代光仁天皇御宇
寶龜年中伯耆國大山有練行修善沙門

欲見地藏菩薩正躰而祈求大山權現年尚矣

05 一夕夢弊衣縑縷老人告曰地藏無於此山

自是東方下野國有從金輪際出生之山号

岩舩山正身地藏在于彼山語了不知所去

夢忽醒矣沙門歡甚踊躍便負竹笈着草

鞋發足行程不恙漸至東野州而尋覓

10 彼靈名之山其鄉人指曰東北之層巒

是彼勝地也於是卸笠拭目仰望則怪

巖高聳松老蘚茂而雲霧覆峯實塵

外無雙之勝境也唐人詩所謂白雲

似帽覆山頂青苔如衣懸岩肩者乎

15 弥信夢想之通氣展懽甚之眉凝渴仰

之膽近到山之趾見有少草庵束松葉為

牆編柴荆為屨草門半傾庭草就荒幽

邃寂寞也日既向迫晚懇請設宿主者

老齡之下僧也挑柴戶延沙門於廬內

進茶設饗後問往來所由審詳說多年

夙志并夢之感下僧曰斯山上時之有靈

應明日必影現之期也沙門不勝感喜

點禱^而之後人來敲門呼曰地藏坊

在乎明日可畊田來把牛鼻繩否又人耒田

25 地藏坊在乎明日可膏屋來可誅茅根否

又人來曰明日可造家來可膏否下僧一々許

諾沙門先聽呼地藏坊之名偏生恭敬心

閉目思惟同日可辨餘多之所作不思議

也黎明以種々飲食施与于沙門曰一日

30 在世而不順人情者家資難給即出去矣

其後沙門飲食訖回視山麓之民呈農

村有把鼻繩所有誅茅根所有膏屋所

一人三所分身三所一躰也點歎而歸草

庵矣日又迫暮色寒鴉歸林遠鐘聲罷後

35 下僧還來疲困而卧矣晨朝起倡沙門尋

九折徑躡巉岩攀薛蘿漸到山上向此

峯可佇立菩薩出現所云了下僧立絕巔

之寄絕吾躬自頂至脚跟一身左右相分

一分便等身地藏大士難見難思妙躰光

40 耀朗徹譬如明鏡写万像三界六道色相

無陰覆分明顯現妙經所謂一切諸群萌

天人阿修羅地獄鬼畜生如是諸色像皆於

身中現者乎合掌瞻礼須臾之頃分身与

本身同合共復一形則下僧也相共歸于

45 麓之庵懇志慰愈以白米一箱施賜可為

寛文十庚戌年三月十五日

伯州大山寺學頭兼檀那院

僧正胤海

緣起持未而令見之即閱紙筆破壞鳥跡不正文字轉誤烏馬有感
不堪嘆息新思令書寫以歸寺既以權大納言通茂卿中院啓照高院宮道
則被染紫毫仍此山令施入畢

此岩船山地藏薩埵者我寺大山寺之与本尊一躰分身之旨
傳聞焉年未參詣之志雖有之不得時默止矣然處寬文

丁未卯月 大猷院殿就御法事日光登山之砌經歸路於佐野

郷里攀此山拜尊像祈二世悉地矣爰別當遵海自疇昔所有

緣起持未而令見之即閱紙筆破壞鳥跡不正文字轉誤烏馬有感

不堪嘆息新思令書寫以歸寺既以權大納言通茂卿中院啓照高院宮道

則被染紫毫仍此山令施入畢

再往詣岩船山則山石草木如旧而無庵室下
僧又不見問訊郷人云相謂久住當村未知
有此異事云若有信心者即見諸佛身
豈可疑乎尔来相繼佛閣僧房寶塔鐘
樓漸宮之經之度民如子来合力遂成大伽
藍号岩船山高勝寺仍緣起如斯

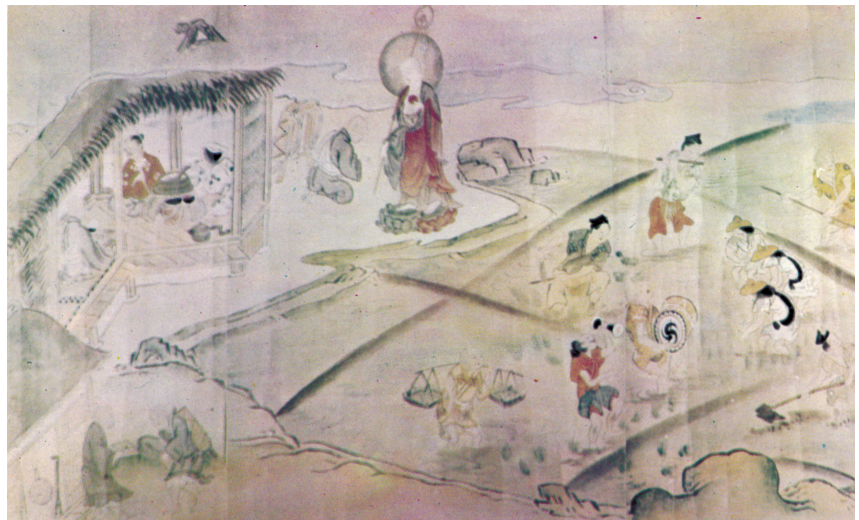
歸路之糧矣沙門且悚慄且歡懌赴于旧
山其舍主報云些少粳米滿于鍋中甚
奇妙也翌日之晚吹亦復如此不擇鍋釜
大小一手裏米盈溢皆然也見聞遠近無不
歎異也竟遷于伯州舊房招請滿山縑素而
平等施齊各飽箱米之飯鼓腹退矣人々
欸未曾有或乞米或求飯為乾糲持者往々
有之也沙門又引撰信心修善同侶數輩

薩菩藏地本地現大智明大



寺山大國香伯

大智明大權現本地地藏菩薩
御影（宮島コレクション蔵）



大山寺縁起繪卷

（佐々木一雄氏編『大山寺縁起』〈昭和46年1月，稲葉書房〉より転載）

〔翻 刻〕

『岩船山地藏菩薩縁起』（全五卷）

岩船山地藏菩薩縁起 第一 「題意」

01 下野州都賀郡駒場郷岩船山來由

夫それ鷲峰の覺月已に雙樹の陰にかくれ

龍華の慧日いまた三會の曉あかつきにいたり給はす

如來の大悲遠く是を悲哀まし／＼切利天上

05 にて御法みのりを説給ひし時等覺十地の大士其

數多き中に此界に甚た有縁なるのミならず

特に大悲闡提せんたいの誓願は文殊普賢觀音彌

勒も及はせ給はぬ故をもて地藏薩埵に

二佛中間の衆生を付屬し給ふ故に古德

10 も所謂ル付屬當身レテニ懷キ雅子ヲ於忍辱ノ衣ニ本誓

徹レ肝ニ温ニム孤獨ヲ於大悲ノ膚ニとハ稱歎し給へり

これによりて三國の感應永く絶やらずわきて

吾朝におゐて國この靈蹤また枚挙しかたし

其中に下野州岩船山の應現日々月々に

15 現當の利物掲焉なり其來由を尋るに

此山を岩船と名る事は薩埵影向の所とて

豎三四間に横九尺はかりの船の形せる岩あり

この岩のほとりに東方にむかへる右の足の印

紋あり其由緒をしらす然るに河内國生あ

20 駒こまの靈峰は本朝開闢の始め天神地神共に

降臨の地なる事舊記に見えたり河府沙

門李叟橘の故實記に云地皇氏第三ノ主尊

天津彦々火瓊々杵ノ尊 迺明星地藏之應化ナリ也

尊受ニ玉ヲ勅ヲ於祖神天照皇ニテレ時龍 舍甲午初テ降ニ

25 化ニテ日向ノ國襲之高千穗峰ニ未レ幾 尊又駕ニ天磐

船於碧漢ニ令ニ天ノ鈿女ニ執レ纜ヲ焉韞ニ翔山戸國生

駒般若ニ嶽ノ上ニ垂レ玉ヲ跡ヲ於此ノ地ニ即磐船大明神是ナリ也

天鈿女ハ者即ニ末社ノ早方明神ナリ也 尊勅ニ云ク却後百

八十萬年ニ有ニ大上根機ノ者一踏ニ此ノ嶽頂ニ驅ニ使シ鬼神一

30 當ニ良ノ嶽背ニ安ニ措セン朕ガ之本身一云神の代も人の世に

移りおほきミも五十代に近き頃役ノ優婆塞茅

原の小角此峰に修練せらるゝ時二鬼を驅使し

一刀三禮の地藏尊を彫刻して安置し給ふ今

35 山崎の地藏堂是也これなん天鈿女尊の懸記し

給ひぬる大上根機の者と社覺ゆれ凡瓊々杵尊と

申奉るは日域開闢御主にて國を饗給ウケふ事三

十一萬八千五百四十二年と見えたり然るに今此靈

岑も河州生駒の如く岩船ありて薩埵影

40 向の靈蹤なれば彼尊應現の舊跡なる事掌

を指すか如ししかのミならず生駒の北方に當りて

大石の上に左の足の印紋あり野人村老相傳

へて瓊々杵尊の遺のこしたまふ御足の跡とそ

云める昔時の靈告は知らされとも口碑ひ今に

消せねは埴州の岩船に右の足跡あり河州の

45 岩船に左の足跡あり左右は是生佛二界を

表示する事なれば日域の衆生を化益したま

はんの御心よりして此靈蹤をとゝめ給ふなる

へし特に右はこれ佛界なるを此山に此跡を

尔し給ふ事甚た深き所以あるへし後の世に

佛法東漸して吾妻の鄙の迷徒にいたるまで

本身薩埵の化導にあつかる事を遙に鑒

たまふに非してなんそや又本願經を拜讀す

れは東方ニ有リ山號ノ曰ニ鐵圍ト其ノ山黒邃ニノ無ニ日月ノ光ニ

有ニ大地獄ニ號ニ極無間トと侍れば御足の東方に

55 向へるは幽迷の獄苦を救ひたまふの本

誓にも相かなへり天竺國中如來の遊化し

給ふ所種々の聖跡を遺し給ふ中に足

跡有事西域記云ク摩訶陀國波吒釐城ノ精

舍ノ中ニ有ニ一大石一上ニ有ニ釋迦跡ノ履ニ玉ヲ雙跡ニ長一尺

八寸廣六寸乃至吾レ留ニ此ノ跡ニ示ニ末世ノ衆生ニ令ニ見ル者ヲ

生信滅罪云唐の玄奘三藏彼土に至り此

靈跡を觀て圖写し歸り太宗皇帝に

奏して鐫行し後四明の延慶寺に重刊す

65 と見えたりそのミならず本朝のむかしを

尋れば八幡大菩薩は宇佐の境内に雙足

の跡をとゝめ給ひ今現在し聖德太子真至

聖皇も御褥の上に足跡を遺したまひ今

和州法隆寺に納めたるを思ふに三國ともに

70 神佛の化導轍を同して本迹雖殊不思議一
のことはりあきらけく大悲深重の御恵いとふかき

にあらずやしかれば兩國とおく隔るといへとも

同しく岩船あり同しく足跡ありてともに

是地藏大士の靈蹤なれば本朝開闢のはしめ

よりして瓊々杵尊本身薩埵の跡を垂れ

75 給ふ地なりといふ事疑ふへからず

〔繪①〕 岩船山南面之圖

〔繪②〕 東面之圖

〔繪③〕 西面之圖

〔繪④〕 北面之圖

御足之印紋

〔繪⑤〕 山上之圖

本堂 御供所

血之池

焰魔堂 籠り呀

冷光堂 十三佛堂 別當坊

護摩堂

二王門 袈裟石 雌龜石 雄龜石 硯石

北六道 閼伽水 鷺巢坂

茶店 山王

常念佛堂

三途河原地藏堂 骨堂

岩船山地藏菩薩縁起 第二 「(題簽)

001 抑下墅國都賀郡駒場村岩船山地藏菩薩は

何人の作といふ事をしらす其濫觴を尋ね奉る
に人王四十九代

光仁天皇の御宇寶龜年中伯州大山の

005 麓に一人の沙門あり其名を弘誓坊明願

とそ云ける年來安心堅固にして大智妙

薩埵を信し奉り修善練行甚た勇健

なりき深信のあまり木像畫圖の類は皆人

間の所為なれは何とそして生身の尊容を

010 拜し奉んと祈り求る事淺からず晨昏

御名を唱へて夢にたもわすれず罪障の雲

おほひて實相の月明らかならざる事をうらむ

爰に一人の法丈あり語て曰筑紫の竈戸山

寶滿大士は地藏菩薩とともに濟度衆

015 生の御誓ありときく汝誠にその志あらは

彼所に詣て祈り奉れなとや生身の尊容を

拜さらんやとおしゆ弘誓肅然として此語を

信し即彼山に参り向ふ

〔絵⑥〕

弘誓坊旅行恙なく竈戸山に詣て通夜し

020 て至心に夙志を祈りけるに旅の勞の一睡の

中に端嚴微妙なる女躰弘誓か枕に立給ふて

東方を指さして生身の地藏菩薩を拜んと

思は、吾妻路に赴き下墅の國岩船山にのほる

へしかならず影向あらん穴賢うたかふ事なかれと

025 宣ふと見て夢さめぬ弘誓歛衽のおもひをなし

御跡をふしおかミ偏に靈告にまかせて東路に

おもむかんところろさし寒暑飢渴をもいとはす

雲山瘴海をも勞とせず千里一翫の心地して

急きし程にやかて下野州に至り岩船山の麓

030 に着くかゝる折節艸刈わらハの通りしに逢

て岩船山はいつくそと問へは此童旅僧の顔を

つく／＼と打なcame吾此業にかゝりてしはしの暇

もおしけれと御僧のありさま誠に遠く來り給ふ

と見ゆれはもたしかたしとて岩船山を指さして

035 いとねんころにおしゆ

〔絵⑦〕

明願よろこひあなたこなたと山路をたとるに

はや黄昏になん／＼として行道もさたかならされは

いさや此所に止宿して明なは山に登らんと

おもひ民家に立寄かりのやとりを求むれとも

040 慳貧放逸の情もしらざる鄙人なれば弘誓か

旅やつれのわつらはしげなるを見ていかなる

わさはひや出来ぬらんとあやぶみて宿をかさんと

いふものなかりけり爰にひとつの艸菴あり

軒端は霧の煙に破れ柴の編戸に竹の垣

045 かゝるいふせき所に住めは社すミけめと

さし覗^{のぞ}き一夜のやとりを求めけるに主^{あるし}の法師
弘誓をつくく見て能^{ねん}こそ尋ね給ひつれ

とて廬の内にともなひいと懇^{ねんころ}にもてなしさていかなる

志のおはして何地より此所^こにハ來りたまふやととふ

弘誓しかくのよしを語れはあるしの僧大におとろき

たる氣色にて我此岩船山におゐてよりく菩薩

の影向有るを知れり餘人更^しにしる事なし毎月

十八日廿四日にはかならず此山に出現ましますなり

旅僧の信願無二なる事をする我廬に暫時^{しハやく}とく

まりたまへ拜ませ申さんといふ明願^き音異^きの思ひ

をなし爰にとまりて心静^{しづか}に菩薩の宝号

をとなへてそ居たりける

〔絵⑧〕

爰に又人來りて柴の戸ほそを敲^{たた}く音す何事

やらむときけは地藏坊いますやととふ伊賀坊宿^{やど}に

ありとこたふ彼者云けるは明日田をたかやさんと

おもふ御坊來りて牛の鼻綱^{はなづな}をとりてたへと

頼むいとやすき事なりと答ふ又人來りて明日

家を背^かへくおもふ萱^{かや}の根を切て給はらんやといふ

心得たりとうけかふ又人來りて明日家をたてん

と思ふ來りて柱を削る工してたまはれといふ是も

また行へしと答ふ又老嫗來りて明日井を掘

らんとおもふ御僧きたりてほりてたへとたのむや

すきあいたの事夙^{つと}に起行^{おき}へしといふ明願逐^し一此

あらましを聞いふかしく思ふといへとも子細ぞ有
らんと其夜の明るをまち居たり

〔絵⑨〕

既に其夜も明わたれは伊賀坊弘誓坊に告て

曰今我里へ出行也一日も人の為に益なければ

資料^{たえ}絶て修行成就しかたし又人の為に益

なければ佛道に入の便^{たより}なしとて庵を出て行ぬ

075 明願是を聞て誠に道心をすゝむるの教誡なりと

覚悟し且は昨夜の有様もあやしくおもひ

麓に出てこゝかしこを見めくるに過し夜聞し

ことく伊賀坊牛の鼻綱^{はなづな}をとる所も有又ハ萱

の根を剪る所もあり其業中^{わざ}くに尋常^{よつね}の

080 人の及ふへき事にあらず

〔絵⑩〕

又伊賀坊柱を削るにいさおし有ひだたくミの十

人してもかなひかたき程^{わき}の業を一人にていとやす

けに勤めける弘誓坊あまり不思議におもひ

ける故家ある限りは見廻りけるに姥の來り

085 て頼し家とおほしくて伊賀坊暫時に井を

掘り土を運ひなとして人の助となれりける

弘誓^{ありさま}此形勢ともを見るにいとく不審もはれやら

すしてもとの庵に歸りけり既に其日も暮

ぬれは伊賀坊も歸り來りて弘誓坊とたゝ

090 佛道修行の物語して其夜も明ぬ

〔絵⑪〕

翌日鳥がねに起き弘誓坊をいさなひ先に立て
山上によちのほるに日いまた出す弘誓に教て曰
あの峰こそ菩薩出現の所なれ至心に掌を

095

合せて端坐せよ今必影向有へしといひて其身ハ
山の脊へ廻ると見えければ明願は恭敬のかうべ
をかたふけ口に佛名を唱へて影向今やと待居る
所に則地藏坊かすかたにて船に似たる岩の上に
のほり東方にむかひて左右の御手にて頭より
あなうろ 跣の下に至りて引わくるか如くし給ふに忽ち

100

金色の光を放ち地藏大菩薩と現れ無仏世
界度衆生故上求菩提下化有情と唱へ光明

十方を照し其光明の中に三界の有情非情の

像をあらはす事鏡中に萬像を浮か如し弘誓

大に驚仰して感涙袖をうるほし唯一心に瞻

105

禮し奉るしはし程過て地藏坊衣を着する如く

左右の御手をもて衣をかゝけ給ふと見る内に忽ち

もとの下司法師となり弘誓坊をともしひ道す

からの物語さなから微妙の説法にしてやかて廬に

帰りぬ

〔絵⑫〕

110

斯て伊賀坊弘誓にむかひ汝日來の所願成就

しぬ急き故山に皈るへしとて路次の糧として

白米一舁ほとおくらければ弘誓未曾有の因縁

有かたくおもひ則暇を乞ひたまはりし米を懐

にし皈路に趣き旅宿にて件の米一合程とり

115

出し飯に炊したへとて宿の主に渡し頼ければ

宿主此米をうけとりて餘りに少分なるを嘲哂し

なから大釜に打入炊しけるに大釜に飯充滿し

ければ見聞の人々驚きあへり夫より毎日宿々

にて件の如くなりければ其餘を乞食なとに

120

施し飢たる人をたすけなどしけるに見る人驚き

聞人信を増さるはなし既に驛路恙なく故山

に歸りて後信心のともから件の米の残れるを

請ひ求め信をなしていたゝきければ靈驗あら

たにして忽ち佛舍利となり或は飯粒より

125

光を放ちければ是を見て發心する者かそへ

かたし

〔絵⑬〕

既に明願は大智妙權現の御利益にて寶滿

大士の靈告を蒙り生身の地藏薩埵に値遇し

奉り年來の所願成就しぬれば信心いやまし精

130

修勤行おこたる事なく身は常に住馴し大

山の寂室に座すといへとも心は遠く吾妻の

岩船に遊びて事とふ人の面影も今や尊像

の影現かと疑れ峰の嵐澗のひゝきも只微妙

妙の説法かとのミ聞えければあるにあられぬ

135

心地して又翌とし初春の頃再ひ岩船山へ

と志しはるく来りて山の麓に至りこゝ

かしこと尋ね見れとも草木そうもくのしけれるまてにて

去歳きさいの秋やとりし菴あまも見えず主しゅの法師

おハさねは明願たふぼうは唯忙然として立たる所しよに一人の

老翁らうおん杖つえにすかりて来りむかふ弘誓こうぜ嬉うれしく

思ひて有つる事を語れは老翁答こたへて吾此郷このさとに

久しく住むといへともかゝる事は曾さだてしらす

御僧ごそうの深心佛意にかなひ給ふならん何の

うたかひか有へき爰こゝにむかひに當たる山の古

松の下に草堂あり曾さだて其草創くさそうをしる人

なし本尊は自然涌出じぜんゆうしゅつの地藏尊靈驗あら

たにして信あれは其利益むなしからす拜うやまつミ

給へと云おはりてさる弘誓翁か語るにまかせて

たつね至りて本尊を禮拜し麓ふもとに下り

郷里きやうりの老若にかたりければ皆みな奇異きいの思ひ

をなしますく信仰の人いてきにけり

〔絵⑭〕

右の御縁起は往古より當山に傳有て天和年中江州三井

寺沙門良觀僧都の續編せる地藏靈驗記第九卷にも

あらまし是を記セリ

155 是より次の段靈驗利益の品々は當山の記録に傳へし

事或は口碑に傳へて今に其跡残りし事又は近來

まのあたり見聞せし不思議の事ともをあらまし筆記し

て後の世に傳るのミ

此本尊のあらたなるにより一宇建立の志しを

160 發おこして近きあたりの農民僧俗にいたるまで

寸竹尺木数くもち運ふ事山の如し竹木

すてに足りぬれは工匠あまたあつまりてほとなく

御堂建立成就ごだうけんりつじゆじゆせり頃は寶龜年中僧坊を

あらため入佛有て此時より初て岩船山蓮花

165 院高勝寺と號なづせり今の本堂に安置し奉る

本尊是なり斯かくて明願律師はミづから我か

影像を彫刻して本堂の傍かたへらに安置し諸人に

尔して曰我永く龍華會を期して此峰に

とまり末世の衆生此山に歩を運び本尊を

170 瞻禮し一念信を生ずる者あらは皆是を記して

安養國裏あんやうこくりの再會を得と唱へ畢りてかき消す如

172 く失給ひ再び行方をしらすなりぬ

〔絵⑮〕

岩船山地藏菩薩縁起 第三 (題意)

001 當國下高嶋村に地藏田といへる田ありむかしいつ

頃といふ事はしらす地藏尊牛の鼻綱^{はつな}をとり給

ひて耕作するものゝ助力とならせたまふさりながら

田面のひろさ四反歩一つかねとて菩薩の艱難^{かんなん}なされ

005 たるよりいひ傳ふとかやそれより後地をわけて一反

四畝一おさとやらんにて畔境^{くろ}を立侍れとも不思議に

くろさかひ立かねぬるよし田のぬしは若葉惣右衛門と

云ものなり此跡本尊の擁護し給ふにや毎年

耕作水旱の障もなく五穀成熟せる事幾としか

010 農民安堵のおもひをなすこれによりて毎年正月

四日の夜御堂にて護摩修行の上民家へ種^{たね}かし

をいたし明年の正月返納する事常例となりぬ

〔絵16〕

人王九十五代 後醍醐天皇の御宇元應年中

上野國新田太郎義貞病難を當尊へいのり

015 たまふに則所願成就して平愈しければ参詣

通夜して供料式十石を寄附したまふ

當國富田村和久井藤兵衛と云もの難病をうけ當

山へ詣て祈るに御鏡餅を備へ奉れと御告ありし

より信心肝に銘し則御鏡餅を備へ奉るに難病

たち所^しに平復しければ夫より已未としことの

020 正月かならず備を捧るにいよく家内安全にまも

らむと霊告まし／＼今に其ふしきを残し給ふ

〔絵17〕

人王百十一代 後光明院の御宇正保年中其

頃の住僧心さしふかく本尊を供養し奉る事

025 おろそかならず一夕夢中に此山上にて百萬遍の

佛名を唱へ祢名念佛永く絶さらしむへしと御告

を蒙りあらたに一字を造立して常念院と號し

不断念佛を開き今に不退の道場となる事ひとへに

尊像の靈威いちしるき故なり

〔絵18〕

030 人王百十五代 中御門院御宇正徳年中當國

朽木町に異名を念佛加兵衛と云けるものつねく

佛道にこゝろさしふかく地藏尊を信仰する事

他に異にして年久しく怠らす或時願望ふしきに

成就し侍れは猶又地藏尊の御名をとなへて一七日

035 の間地藏念佛と名つけて六七歳はかりなる

童を催し昼夜すゝめけるに志し有ものは聊の

財施^{ざいせ}を捧る故則岩船山へ納め奉り其餘分にて

石地藏尊を建立し供養す其志しを感じて在く

所々町々まで誰も皆こそりて唱へ奉る夫よりして

040 國々へもひろまり地藏尊の縁起をうた念佛に

つくり鉦太鼓つゝミ其外種この鳴物^{なり}を集め思ひく

心く／＼に念佛を唱へ奉る事になりぬ

〔絵19〕

地藏念佛これより流布して近國他国までもて

045 はやし種々の物真似^{ものまね}なとして岩船山の地藏念仏
と名つけ寄進の施物を當山へ捧げ残る所ハ村々に

銅鐵木石の類にて尊像を造立し毎日貴賤男

女袖^{ひるがへ}を翻し参詣す又月この十八日并四日にハ當山へ

近在遠境をわかたすまふて來て病難消除をい

のるにかなはずといふ事なし

〔繪20〕

050 享保改元丙申の頃堂舎大破に及びし故再^{さい}宮^{みや}せん

ことをおもひ立けれども自力にかなひかたくて現住の

僧も時節を待居たる所にいつともなく僧一人所々にて

材木をととのへ岩船山と札を付置ぬるに誰引よするとハ

なけれど所々の材木皆當山へ寄來れり其材木を

055 調へたる沙門は當山よりは出さりしに何^{いか}なる者やらん

と疑ひはれやらす若や地藏尊の現したまふにやと

人々感し傳へし又平地を百四五十人ほとにて引

なつミたる材木を嶮^けしき山坂を百人にもたらさる

人数にて引あくるに流に下る船の如く容易^{たやす}あかる

060 事更に人力のなすわさならずと諸人いよく感涙を

催し信心肝にこたへたり爰に又當國富田村の者

とも三十人はかりして輕き材木を引上來れりかゝる

時にはいつとても開帳をねかひ拜ミ奉る例なる

うへかれらも希ひし故則戸帳をひらきしに尊像

曾て拜まれさせ給はす其中一人の男我のミひとり

おかミ得ぬ事よとなけき罪業の程もはつかしく

泪なからに庭にたゝすみけるか餘り不審はれやらて

其中に疎からぬ丈にひそかに語るに其男も拜し

奉らすと答ふ是を聞てたれかれも皆拜む事を

070 得さりしと詞をそろへて懺悔^{さんげ}し歎きあへりかゝる

所に念佛堂の方より僧一人來りて云けるは

唯今山上へ大木を引上れとも人数すくなきゆへに

中く動かしがたし各も力を添てたひてんやといふに

皆くやすき事なりとて人数に加はり難なく引

075 上ければいつものことく開帳有しにはしめおかまさりし

人こもありく々と拜たてまつりて始よりのあらましを

かたりけるに各寄異の思ひをなしききに見えたる

沙門は定て本尊の出現ましくて力を合せたまふ

ならん又はしめにかたくの拜ミ給はさるは地藏尊我く

080 に力を添へたまふとて御厨子の内におはしまさぬ

ころにても有つらんとてかた見に語あひ随^ずひし

弥信心わたくしなく皆感涙袖をそしほりける

〔繪21〕

當國柳田村は日蓮宗のミ多して餘宗ハわつか

八九人ならてハなし然るに地藏念佛所にて興行

085 につき此村にても何とそ企たき事なりとて大工八

右衛門といひける者勧進の本主にて念佛をはしむと

いへとも僅^{わずか}の人にて賤施もあつまりかね石地藏も建

立しかたしとて各菩提所へ集り念佛興行も今日

限りにて今まであつまりし施物は岩船山へさゝけ申

090

へしとて他念なく寶髻を唱へける中にも八右衛門
音頭なれは一心不乱にとなへけるか如何なる故成覽
俄に卧して息絶ぬれは有合ふ人と肝を消しなくく
なきからを葬りけり

〔絵22〕

095

斯て八右衛門頓死せし後其村の若きともから当山へ
まふて本尊を拜しそれよりあなたこなた見めぐり
普請場なとまで見ける所に彼頓死せし八右衛門まの
あたり働^{はたら}き居たり若き輩目を見合せさても世にハ

100

かほとまで面^{おもて}の似たる者の有ものかなと云あへりし
か餘りに不審はれされはいさや尋て見はやとて八
右衛門にてハなきかと呼^よければ誰^{たれ}そと答て人々を
見て各よくこそ詣て給ひつれといらゐせしにミなく
おとろきあら心得ぬ事かな和ぬしはいつくの頃念仏
唱へなから身まかりたる人の今爰にある事夢にてや
あるらんとかたれは我死したる覺えさらになしいつ
そや各と念佛となへ居たる所へ岩船山より御僧

105

一人來り給ひて山上の普請いそくといへとも工匠
すくなき故いま成就せず汝今より此山に來りて
助よとありし故直にともなひて至り見るに普請
いまた半^{なか}なり今日より四五十日はかりか程ハ宿^{やど}へも
かへるまし跡の事ハ頼ミ侍ると云てわかれぬ
皆々疑ひなから急き柳田村へ歸てかれか墓所
を掘發し見れば八右衛門か骸はなくて御袈裟

110

一丈残り末世の寄特佛法の不思議ありかたき
事言葉に及ひかたし

〔絵23〕

115

さて昔の御堂より後の山を切おろしぬるに
四方より貴賤老少にかきらすきそひ來りて念
佛して手々に土を運ひければ忽^{たちまち}地形も成就し
享保六年御堂も造畢し並に大佛千駄護
摩堂山王社稻荷辨^{はん}天宮其外数々の堂社

120

残る所なく建立せり然れとも寶前に額のなき事
を住持朝暮こひねかひしにはからすも翌としの
秋彼岸にいたりて當國寒河郡下河原田村神山氏
病氣本復の願望成弁せるにより額を捧け奉んとて
其頃佐々木玄龍子とて七十三歳になれる人當時能筆の
譽有し故此額字を乞求めて今寶前に掛奉りぬ

125

〔絵24〕

岩船山地藏菩薩縁起 第四 「題意」

001 かく靈驗日々に新なりければ遠近の男女参詣の

道俗ますく多して御戸をひらき尊容を拜せん事を

ねかふやから日ことに五度三度に及へり然るに享保

八卯のとし六月十三日より十五日まで開帳を願ふの

005 もの一人もなかりければ如何なる故ならんとあやしミ

思ふ折から十五日未の刻頃上総の國の者なるよし

にて七八人伴ともなひ来りて開帳を願ひしにより住持

湛盛寶前におゐて例のことく其作法を修し御戸を

ひらかんとせしに御厨子は常の如くながら本尊は

010 まします湛盛甚たおとろきとりあへす彼参詣の

輩に對していひけるは當山本尊の御事ハさためて

かた／＼にも聞及ひぬらん靈驗あらたにして年こかゝる

事侍りて因縁うすき薄き輩は何程開帳懇望ありても

尊容拜まれさせ給はぬ事間まこれあり各にも因縁

015 薄き面々と見えて戸帳ひらきかね候得は此度は

枉まげて下山候得と宥なだめて歸しぬ

〔繪〕

抑宮殿嚴重にして御戸のしまり御厨子の有様も

常に變る事なければ人の取出し奉るへきやうもな

しといへとも若や盜賊の所為しわざにてもやあらんと湛盛

020 これを歎き御行衛を尋ね御ありかをもとむる事

日夜をわかたす近きあたりハ更さらなり遠き國の山

林まで人を走らして尋奉る事二月餘りに覃およへ

とも爰にましますと云おとづ信もなく住持進退究て

諸天に祈り歎しに其年九月朔日の夜夢中に

025 本尊影向石御船岩の上に立せたまひ光明十

方を照し湛盛に告て宜く是より南の方

海邊の有情世渡る業とは云ながら旦暮あけくれつた

なき殺生をのミいとなく我に因縁うすく一毫の

善種をも植ふる事なく唯造惡たぐさうあくのミに日を送れば

030 後の世永く沉淪ちんりんせん事を悲しミかれらを濟度

せんために海邊に至りて多くの衆生に縁を結ふ

なりと宣ふと夢見てければ夙つとに起て彼影向

石に至りて見るに苔むし露むすへるのミにて

其驗しるしとてもなければなく／＼歸りてさもあれ

035 ふしきの夢を見つる事よと思ふにつけてもいよく

尊容の御ありかを慕したひて歎き居たる所しに其朝

辰の刻頃常陸の國の者のよしにて一人の男参詣

して院主に對面ひまかし密に物語したき事有よしを

云ものあり何事にかといふかしくて則面謁せしに

040 彼者申けるは某事ハ當山御本尊の靈驗を

蒙りし事ありて報恩謝德しやとくのため又は往生浄土の

夙願侍る故當年まで七年の間怠らす廿餘里を

遠しとせず月毎に一度は歩を運ふ者にて候

然るに當夏の頃よりさかなき世の浮説に當山の

本尊はいつちともなく飛せ給ひて此所こにハまし

045 まさぬ故日夜たつねもとめ給へともいまた御行衛しれ

050

させ給はぬよし區まくに申ふらし候實にてもや
候覽然るに此ほとほのかに承りしハ下總国銚子と
やらんにて岩船地藏尊開帳有て参詣の諸人
群集せるよし慥に聞及ひて候へは彼國へ人をやりて
たつね試しやうみたまへかしとかたりければ昨夜の靈夢に
符合せし物語謹盛信心肝に銘し雀躍歎
喜する事限りなく則才子覺成坊にめし仕ふ男
二人差添下総州銚子邊へそつかはしける

〔繪26〕

055

覺成坊昼夜三日を歷て下総国に入爰かしこ
にてとひ聞に告來りし人のいひしに遠ふ事なし
急き至りて見れば銚子より一里餘近所にて

060

海上郡三宅村地藏院と云へる真言宗の寺にて
開帳有参詣群集おひたし覺成坊すなはち佛
前に詣て拜し奉るに年來朝暮拜し奉りし本尊
なれはいかてか見ちかへ奉るへきまかふ所もなき尊容
なれば住持に對面してしかくの趣を語り本山へ
還坐げんざなしまし度よしこひ求む住持則其村の

065

役人なと呼集よひあつめて云やう和僧の宣ふことく岩船
山の本尊にまかひなき事ハ此方にも其しるし
侍るとて始よりのあらましを語りしは當夏六月
十二日の夜年の頃十七八はかりの僧一人來りて
云けるは我此地に因縁有て來れり門前に
見えたる二間四面の堂に暫時の程寓居し度

070

よし望まれし故いと易き事なりと許諾せしと
夢見たりしゆへ不思議なる夢を見たる事よと思ひ
翌十三日の曙に地藏堂に詣見れば壇上に威
靈の尊像御足の下に古き折敷をしきて立せ
給へり其折敷を見れば下野州岩船山宝前
と記してあり嗚呼おもひよらざる事かな昨夜

075

夢見し客僧は此尊像にてこそましますらめ
去なから如何なるわけともはかりかたければ異人
には此事かたるましと思ひ直に尊像を自坊に
移し秘し置て曾て人に知らせさりしにたれ
告るともなく此事を尋る者ありし故空事なりと

080

こたへしに近き里くの男女或は夢に感し
或はたしかに聞しなとこゝろくに尋ね來る事
やまされはさのミハつゝみかたくてあらましを語り
ければしからは未曾有みぞうの因縁なれば開帳して
我等こときの罪ふかき衆生に善縁を結むすはせ

085

たまへと村よりしきりに懇望するゆへ止事やむを
得ずして今月十日まで三十日開帳せしめ候也
誠に岩船山は日本の伽羅陀山にて自然涌
出生身の尊像靈驗あらたなる事隠かくれなければ
かゝる奇特の尊像を過土に久しくとめ奉る
事ハ其おそれすなからず候得は懇望たまふに任て
還し奉るへしと速に領掌ありける

090

〔繪27〕

斯^かて九月十日まで開帳事故なく終りける故

095 同月十七日本尊彼寺を御發輿なりければ近里の道俗わかれをおしミ奉りて悲歎する聲むかしの

沙羅林雙樹の悲もかくやと思ふばかり也道の程七八里はかりは老若手々に鉦太鼓にて念仏宝號を唱へ絶す送り奉り驛つたひ四日にて井日申剋頃

當山本堂へ還坐ならせ給へり近里遠境の庶

100 民よろこひ拜し奉る事限りなし誠に經にも遊

戲十方度脫衆生と說せ給へはかゝる利物は

おはしますへき事なれと末世濁惡の世界現在の不思議ありかたき事ともなりと見聞の道俗感歎随處し奉りけり

〔繪28〕

105 安置し奉る本堂の瓦破壊に及ひぬ其頃の兼

帶住持智洞良然の两大僧都相ともに是を愁ひ

永く不朽ならしめんため銅瓦にてふくへしと志願淺からされとも自力におよひかたければ江戸におゐて六十日の間開帳の事を 公所に願ひ奉り速に忍

110 免を蒙り享保十七年子の四月朔日より目黒不動尊

の境内にて開帳せしむ老若男女參詣群集種々の

靈驗利益其数多く兎毫^{とがう}のおよふ所にあらず其中に

四月井日頃より誰か云出せしともなく江府の内巷に

此度岩船地藏尊目黒にて開帳有し所^しに本尊は

115 このほと岩船山へ歸らせ給ふと流言ありければそれ

より詣て来る人も稀に成けり扱もかゝる無益の

風説いかなる者か申觸せしといひあへる折即同月井四日の朝岩船山より羽檄^{うげき}をもて井二日の申の剋

頃本尊紫雲に乗給ひ本堂へ歸り入らせまし

120 まずよし告來りしにまた其文も見はてぬ程に

又飛脚きたり井二日暮時過に入らせ給ふ本尊うせ

させたまふと告來れり世上に云觸せしふしきの

風説其驗^{しるし}ありて凡慮^{はかり}の料り知へき事にあらす

本より開帳場の本尊は始終巍然^{きぜん}としてまし／＼

125 けり尊像猶かくのことく神變の應用ましませは

泥木圖像に三身を具すといへる祖師の明訓

いよ／＼信すへきことなり

〔繪29〕

又廿四五日頃より晴れ曇りのわかちもなく日々

參詣群集しけりさて詣て来る人本尊の御面貌

130 赤色と拜せし者もあり又は金色白色黒色と

品々におかミ奉る諸^人巷にあらそへり誠に事識の感

見人々不同成るへし利益多き其中に目黒境

内に年久しく壁^{ひざり}の乞食有身の程の淺ましきを

悲しミ前の世のむくひも歎かしく唯後の世を

助らんことを思ひて信心皈敬淺からず毎朝滝

にて洗浴し業障を懺悔しひたすら極樂^{浄土}を

祈求する外他事なし斯て三十日程経ければ歩

行起居少もとゝこをりなく常の人の如く自在に

なりぬ現世の利益既にかくあれは往生浄土の誓約もむなしからしと見聞の人々皆随岳の泪袂をうるほしける又中橋邊に鈴木大和といへる陰

陽師あり夙願の事ありて参詣せしに信心実

ありて感應道交し直に生身の尊像を拜し

奉り今世後世の大願成就せりとて其業を

其子に附し自ら石にて尊像を彫刻して淺草

金龍山寺中智光院の門内に安置しけりその

外の靈驗一々記するに違なし

〔絵30〕

同閏五月九日目黒御發興にて東叡山本院へ

入らせられ 准后一品大王御拜あらせられ其夜は

惠恩院に御止宿翌日御發興ありて十一日岩槻

慈恩寺へ入らせられ十日の間開帳畢りて廿二日

御發興にて井四日未剋頃山下まで還着し給ふ

此日大空も快く晴て曇りなしいつくともなく

音楽聞えて参詣供奉の道俗たしかに聞し

人もあり又常ならぬ響なりとて驚く輩も有し

とかや坂の上御袈裟石の邊より白色の天花

乱墜し時ならぬ雪かと疑る地に墜しは忽ち

消しかと清き昏などにて請とめしはとまり

又は木の葉なとにとまりしを諸人あらそひ

拾ひ得て信心の者は一心に頂禮恭敬し

護持せり信心うすき者の所持せしは程なく

消えてうせしとかや

此としの秋本堂残らす銅瓦にふきかへ奇麗の

壯觀残る所なければ庶民の信心いやまして靈驗

ますくあらたなり

〔絵31〕

寛保二壬戌年兼帯住持權僧正良然年來の志願

にて三間に五間の樓門建立成就し密迹金

剛の像を安置せり

翌癸亥年四月朔日より兼帯住持常玄三王門

建立供養の法事を遂行ひ三十日本堂に

おるて開帳せしむ近隣は云に及はす他国遠

境の道俗衆詣群集して道もさりあへす其中

靈驗利益を蒙るもの其数多し上州太田の郷の

者とかや六歳の男子を抱て参詣し御船岩に

のほりしかあやまちて其子をとりとせり断崖にて

岩石峨々と聳五六丈築上たるかことく其さま刀の如く

劔に似たり草木の生へき便もなく中々人足の至る

へきにあらず禽も翔かたき所なれば人々周障騒け

とも力なく徒に岸下をのそみ見れば二丈斗

下すこし張り出たる岩の上に小兒とまりて

聊恐るゝ氣色もなく安然として居たり各杖よ

梯よと立騒く間半時はかりときうつれとも

更に啼聲もなしからうして竹階子など持來り山

間に道を覓深谷に分け入石より岩につたひ岩より

石に梯してやうくと抱き得たりしに身体少も
痛所なく平生の如し偏に尊像の加護にあらすは
なんそ身の全き事を得んや皆人蘊生したる心
地にて毘悦の感涙とゝめかたし誠に常情のはかる
所にあらず

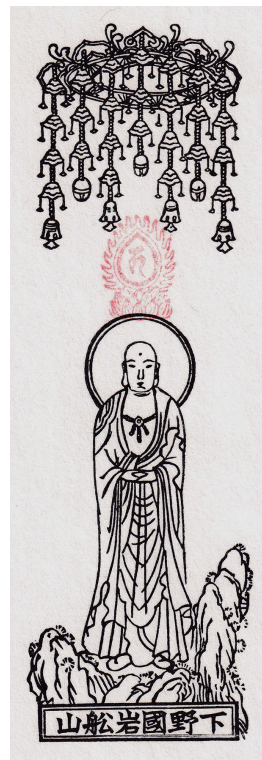
〔絵32〕

此月の晦日まで開帳畢り其夜より三日昼夜
大雨滂沱たり閏四月朔日の夜戌の頃より本堂
宮殿の内にて御誦經の御聲ありて緩ならず
急ならず低からず高からず堂の内にて拜聴セ
しも二三町ほど隔たりし所にて聞しも其御聲

高低清濁さらに遠ひなし朝夕の剋頃に御聲やミ
けりかゝる事はむかしより時と有事故今に
毎月十七日廿三日の夜は遠近の老若男女御經
拜聴せんとて通夜する輩おひたしく念佛寶
獅の声やむ事なし其中僧俗にかきらす因縁
厚き者はたしかに拜聴する人もあるよしいひ
つたへ侍る

〔絵33〕

岩船地藏御影三休



孫太郎尊御影



(宮島コレクション蔵)

岩船山地藏菩薩緣起 第五 「題意」

001 寛保四甲子<sup>此年二月廿九日
延享と改元有</sup>山上堂舎修復^の為に開帳の

事 公所に願ひ出しに三十三年未滿にてハ免許
なりかたき掟たりといへとも別段のよしにて願ひの通り

005 公免を蒙り二月十一日より八十日の間江戸湯嶋
天満宮社地にて開帳せしむ此年正月水戸從三位

宰相宗翰卿の祖母養仙院屋公より御紋付白地

錦の戸帳一掛御寄附の上庄嚴のためとて御紋付
紫の御幕二張御貸下さる薩州大守中將継豊卿の
簾中竹姫君より紅地錦の七條御袈裟を獻セ

010 られ御めし替あり其上御紋付赤地錦の戸帳一掛
寄附せらる二月三日御發輿にて驛つたひ四日の

間宿と村この貴賤男女まねかさるに集り供奉し
送り奉り六日未剋頃湯嶋の開帳所へ入らせらる

015 此日供奉の道俗男女雲のことく霞に似たりかく見
聞の輩ハことく本尊の引摺利益にあつかりなん

いとくとふとく覚えけり

開帳中諸人の渴仰前々に倍し日々の参詣いや
ましなり紀州從三位宰相宗將卿尊崇あさ

020 からす御紋付紅地錦の七條御袈裟一通り嫡男
直松君より同じく一通り簾中富宮□□ならひに

御部屋方より一通り宛都合四通の御袈裟一箱に
入寄附せらる三月井三日御めし替ありて諸人に
是を告しらしむ

湯嶋近所三組町西村作左衛門妻とめといひし

025 平常神佛に皈依し特に當尊を渴仰する事

よのつねにこへたり然に過去の業因にやことし三
歳になれるひとりの女子正月の末より疱瘡を煩ひ

二月十二日八時終にはかなく成ぬ父母の悲歎譬るに
ものなしといへとも歎きても歸らぬ道な□は今はさハ

030 霞説童女頓證菩提の為當尊へ祈り奉るより外は

なしとて夫婦もろとも開帳場へ歩を運ふ事毎日
数度限りなし夜半にハ別して觀念し夙に起ては
禮拜して餘事を絶たりし三月四日の七時頃妻一人

035 参詣しまつ焼香場にて一炷の香を拈し居たり

しに香爐の側に年の程五十歳はかりの僧薄き
黒紗の衣に金襴の袈裟をかけて居たりしか
群集の中にて其妻の名を呼て其方ハ先月三

040 歳の女子に離れ夫婦の歎きおしはかれりと宣し故
嬉しくも訪はせ給ふものかな如何なる□方にて候得は

かほと群集の中にて有難き御尋に預りし

訪はせ給ふことく獨の子にはなれ父母の歎きやる
かたなく御思召しやり給り候得と答ぬれば此所に

045 暫時待候得と有しゆへ相待居たるにしばらくありて
白色の系を携^{たづな}来^きらせたまひ是はこれ本尊

御手の系なり汝か志の实を感じ引切て與る間
深切に念し候得と尔し給ふ誠に有かたき御志し
頂戴仕候と御礼を申述へ御内陣へ入り本尊を拜

し又焼香所に來りかの御僧へ猶も御礼申上なんと
思ひ尋しに其御僧は見えさせ給はす爰やかしこと
尋ねめくれとも行方しれされは日を経て毎日夫婦参

詣してたつぬるに終に尋あたらしり然るに其僧
形曾て外に見る人なしおもふに其妻の志深重成故
生身の尊像現し給ひいよく信心を勧めたまふもの
なるへし右の系を諸人打寄て拜するに潔白^{けつぱく}にして
絹糸にもあらず麻^{あさ}いともあらて蓮の絲に似

たるよしを申あへり

〔絵34〕

夫婦の者一心精進の感する所生身の尊像に値^ち遇^ぐ
し證^{しる}しの絲を授かりしにより信心ますく増長し
けるに不信の輩何の絲なりやおほつかなきよし
申ふらしければ夫婦も傳へ聞て凡心の淺間し

しさ少し疑ひの念生しける然るに又并一日の夜
夫婦もろとも同じく靈夢を蒙りけるはさき
頃焼香所にて値遇せし御僧枕上にたゞセ給て
志願成就のしるしに白色の絲をあたへしに不信の
輩の言語を傳へ聞うたかふ心のきさす事宜しからず

必ず疑ふ事なかれと示し給へり夫婦夢さめて
おとろき恐れ則参詣して寶前にて發露懺悔
し信心いよく深く成りぬ猶更毎日夫婦参詣する
事或は三度或ハ五度怠る事なし彼糸を少し
はかり受納したきよし常玄懇望せしによりて

二寸ほと二筋與へたりき其後常玄彼夫婦の者に
逢て委しく尋ければ夫婦の者の曰童女去年
二歳なりしか夏の頃より母と同じく三寶に

皈依し朝夕地藏の和讃又は寶號をととなへ
或時は観音三十三所の詠歌を暗誦し所々の
神殿佛閣に詣て侍る事成長の人に超たり病に
染るの前日まで當尊湯嶋へ入らせられ候事を待
かね落涙し近所の靈雲寺へ乳母とともに

参詣し庭に立せたまふ地藏尊を伏し拜ミ三繞

して歸しよし十二日の朝も母の膝の上にて御開
帳所へまいりたきよしひたすらに願ひ歎く故頓て
快くなりなは参らすへしとすかしければ病氣本復
までハ遅く候儘ミつからはいま参り候なりといらゐして
其後は言葉もなかりき八時過本尊の御供を申
うけて與へければ三粒いたゞきは是を服して息たへ

たるよし委しく語るを聞て思惟するに正しく
本尊かりに孩児とあらハれ給ひしかも早く身
まかりて父母にいよく誠の志をすゝめ給ふ廣大の
方便なるへし

〔絵35〕

此度の開帳中もまた靈驗利益ますく多かり
し中聊七八事を記して末の世に傳るものなり
湯嶋天神門前天満屋善次郎妻名はしをと云り
常々尊像を信仰する事淺からず然るに初春の

095 頃より心地例ならず日にしたかひ病に染ミ鍼藥も
驗なく弥生の初方より枕もあからす飲食も絶

ぬれは親戚打寄り歎き悲しミ露の命の消なん
事をおしミ今／＼となりて時を待はかりに成ぬ十一日の

夜丑ミつ頃病女夢にも非ず現にもあらず尊貴の
人にむかひて應對する躰しはしにて送迎の

100 會釋まで残る所なし暫時有て夫に告て云けるは
扱も身にあまりて難有貴き事の候ものかな昨日の

夜岩船地藏尊此穢しき病牀に入せられまの
あたり告給ひけるは汝此度の大病定業必死の

105 かれなしといへとも尋常篤信の志弛されは
命を救ひて得さすへし努／＼疑ふへからす唯

至心に我を念する事怠ることなかれ又あすの
夜八時に来んと宣ひ歸り給ひぬ今朝此事を

人々にも語らむと思ひしかとも不信の輩ハ却て
謗を生し罰を蒙らん事を恐れて語さりしか

110 誓約にたかはせ給はす今夜又入せられミつかから
左の手をなてたまひ夜明は快氣すへし此

供米をいた／＼くへしとてあたへ給ふ故ひとへに
有かたく御礼を申唯今歸らせたまふ御跡にて

115 ひたりの手を開き見しに柔なる精白の御供
二粒掌の内にこれありとて人々に見せければ有

合ふ面々感喜の涙おさへかたく餘の不思議故
家内の者は云にも及はず近隣の輩まで呼び

あつめて拜せ頂戴しける今まで枕もあからさり
し病女他力もからすしてひとり起居し食物を

120 請ひけるゆへとりあへず飯を與へければ快く喰て
けり其日の昼過にハ起居自在になり家内歩行も

病る者のやうにも非ずほとなく平愈し翌日より
開帳場へ日毎に詣て拜ミ礼し奉事怠らず

〔絵36〕

下谷長者町二丁目和田清右衛門と云男初春の頃

125 より難病にかゝり陰囊夥しく腫れ苦痛堪
かたく二月中旬より飲食も絶ぬれはあまたの醫

師も術つきて必死と見えければ七旬におよひたる
其母歎き悲しむ事限りなく當尊へ祈誓し

130 けるは老の身の消なん事露おしからす何とそ
大悲の方便にて我子の命にかへさせ給ひて憂苦を

たすけましませとせちに祈り誠を開帳へ参詣
し御袈裟の切を懇望し歸りて病者に其

趣を云聞せ一心に祈念せしに痛所破れ膿血
なかるゝかことく苦痛忽ち忘れ掌をかへすか如く

135 平復しけり
同所一町目何か母としころ眼病を煩ひ近き

頃は黒白の色も見えわかぬ程成しか日參の志
願をおこし御供をいたゞき献備の御茶を申請て

140 眼をあらひしに忽に明らかなり平愈しけり
筋遠橋中町河内屋平七忤善六といふもの當年

十六歳なり目の上に贅のこき腫物あり良醫を求め種々療養せしかとも其験もなかりしに二月六日本尊湯嶋へ入らせられし日より開帳の間日参の願を發し祈念せしに四五日過て腫物自然と平愈して其痕あともなし信心いやまして家内の者もろとも日々にあゆミをはこひ敬礼尊崇おこたる事なし

〔絵37〕

湯嶋天神女坂下小道具屋平七裏店に夫ハ治介妻はかねといふ者あり夫は日々に物を荷ひて買賣し妻は櫛くしの葉なと賣て貧しく世を

渡りける者の子に伊之介とて當年十歳に成るまで雙足立かね歩行もなさりければ其母常々信心淺からず當尊に皈依し開白の初日より毎朝参詣し櫛を一兩枝つゝ擎して我子の業障消滅病難消除を祈る事他念なかりしに十餘日を経て伊之介脚の屈伸くつしん自由になり表の石坂嶮しきも木屐きにて往来し日々朝夕おこたらす参詣しけり

土屋家に側近くつかへし長谷川彦右衛門とて當年二十六歳の男去冬の頃より兩耳全く聾じて氣力もおとろへをのつから飲食も絶く成ければふたりの親を始めうとからぬ者の歎き少からず此男常々信心も薄からさりければ當尊の靈驗利益あらた

なる事を傳へ聞四月二日に開帳場へ参詣し一七日参拜の祈念をいたし歸りしに翌三日より鐘鞆のこゑなとほの聞へそれより日々聞る事近くなり一七日成就せる八日の朝より密語にても聞たかふ事なく全く平愈せしにより偏に當尊の利益なる事を感じて信心堅固になり則湯嶋門前にて身軀を洗浴して百度まいりいたし住持に對面して

感涙を流し物語をなし十念をうけて歸りそれよりいやましに参詣怠る事なし居所は本所扇子橋邊土屋氏の下屋鋪の内なるよし

〔絵38〕

本所石原多田の薬師のとなり常陸屋四郎兵衛男子五郎吉當年十八歳なり二月廿五日より煩ひつき腸満の大病になり日にしたかひ衰おとろへて四月十一日の夜ハ既に今ハの際きへと見えぬれば鍼藥しんやくを播ほすに便りなかりき其父四郎兵衛年來地藏尊を信仰せし上殊に當尊の利益あらたなる事を思ひ願を發して翌十二日の朝寅に起て前なる大川にて七度浴し夜もはやほのくと明わたりければ湯嶋開帳場へ来り百度まいりの志願を發し懇に祈念し我子の病痾たといなにとそ快復なさしめ給へ假令定命にて必死はのかれたくとも暫時苦痛をまぬかれ極樂往生を遂さしめ給へといと懇に祈念し百度参成就して急き宿に歸りて見るに病者いよく

衰て四時頃さしまりぬれは四郎兵衛なく／＼一口
ふくめし水を快く吞みおはりねふるか如く息たへ
たり雙親昆才啼悲しめとも歸らされは死骸の

枕をかへ置んと四郎兵衛亡子の側によりて何くれと
とりはからふ内に思はすも亡者聲を出しける故

四郎兵衛を始め家内の人々驚きながらよろこひて打
寄顔に水なとそゝきければ眼をひらき父母に

210 215 220 225 230
むかひて云けるはすてに命終りて冥途におもむき
道の程廿里はかりもあゆみ行かとおもへは二筋の

岐にいたり祖父祖母に行逢けりふたりの人訪はせ
たまふは汝はなにゆへに爰に來れるやさそな四郎

兵衛歎きかなしむらんなと宣ひてしはしかたらひ
休居ける所へ黒き縮緬の衣を着したる御僧

200 205 210 215 220 225 230
未らせたまひやよやまで五郎吉汝此道を通りてハ
あしかりなん早く我にしたかひこなたへ來れと宣ふ

ゆへ彼御僧にいさなはれ此門口かどまで來りける時御
僧の宣ふは汝かすみかハ是なりとて我脊はなを三度

200 205 210 215 220 225 230
たゝかせたまふゆへ後を顧れは我は是湯嶋の
開帳場より未れるなりとて忽ちかくれて見えたま

はすと始終を語りて早く食事を與へ給へとこひ
求めける故粥よめしよとひしめきければ只常の

飯を與へよと望ゆへ小盞に飯をもりて與へければ
三盞まで喫畢て氣力も平生の如くなりしはしか

210 215 220 225 230
程見る内にはれふくれたりし顔も自然と愈て

起居もおのか儘にして八半の頃ハ多田の薬師へ母と
伴ひ百歩はかり参詣せしよし翌十三日早朝に

四郎兵衛開帳場へまふて來て御禮のため又百度

215 220 225 230
まいりをとけ住持に對面して感涙袖をしほり
始終を委しく物語して御袈裟の切を乞請て

頂戴してそ歸り去りぬ其後十日ほと過て五郎吉
開帳場へ参詣し十念なと授り信心いやまして

220 225 230 235 240
渡世のいとなみ業も心にそます夜となく日となく
唯尊容の事のミ憶念し暮しけるかとてもかくして

有へきにもあらされはふたりの親に志願の趣を申のへ
許容をうけ此年の秋八月の頃形を替へ剃髮染

衣の身となり其名を欣心と改ため稱名念佛の
行者となれり誠に井歳にもたらてかゝる深重

225 230 235 240
の志し過去咸世々の契りなるかおほろけの因
縁にハあらしと聞人随在し見る人感涙絶やらず

〔絵39〕

下谷竹町壱丁目家主平三郎店大工四郎兵衛

當國佐野犬伏宿生れの者にて若年の頃より

當山へ詣て來て本尊の靈驗のいちしるき事を

忘れされは此度の開帳にも日々値遇の因縁

230 235 240
怠らず詣てしか四月晦日の暮方に参詣し

もはや明日は閉帳のよしに候得は明早朝にまいり
御いとまこひ拜し奉るへきなと心中の誠をのへて

歸りて打卧しける夢に本尊入らせられ四郎

235 兵衛くゝと名を呼はせ給ひ宣ひけるは此家の裏
桜の木の下土中に我か分身の聖容とし久敷

埋れ有汝はやくほり出すへしと御告ましますと
おもふ内に嵐の音に驚きて夢は覚けり

不思議のゆめ見つるものかなとおもひ寅に起て
夜の明るを遅しと寶獅を唱へまち居たる

240 程なくほのくゝと明わたりければ靈告にまかせ
裏なる桜の木の下を二尺餘りもほりたるに

はたして御長四寸はかりの尊像泥土にまミ
れてましくけり香水をもて灌きあらひて

245 拜し奉るに儼然として殊勝なる事云はかり
なし則我家に安置し香花を備へ早速開帳

場へ参りまふて佛前にいたり夢中靈告の有
かたき事を御禮申上其後ミつからすこしの

御厨子をこしらへ安置し護持して當山本堂へ
納め奉りけり四郎兵衛若年より値遇の因縁

250 淺からす其志し誠あれハかゝる不思議の御告を
蒙りし事よと見聞の随處限りなし

此外靈告のあらたなる靈驗のいちしるき数くゝ
にして岐の説多しといへとも風説傳聞のさたか

255 ならさるはこれを残しぬ右記す所の七八事は
住持直に其面々に對して委く其始終を尋

問し大槩を記して後の世の信心の族いよく信を
増しめんか為且は當尊の利益靈驗餘尊に

超えたる事を知らしめんとして筆記するもの也

260 五月朔日まで開帳八十日遮障なく已剋東叡の
僧侶を延屈し供養の法事をいとなミ閉帳す

此日未剋頃東叡山等覺院へ移し入奉る十九日
まで御逗留

265 翌二日紀州宰相宗將郷椋町の館へ屈請せられ
拜有此時伽羅木をもて新に佛工に命して

彫割せられたる地藏尊像一躰ならひに延命
地藏經一卷本願經一部自ら外題を書し

別紙に志願の旨を自筆に染て奉納し永く
當山にとゞめらる三日東叡山の本院へ入興

270 一品大王御拜あらせらる七日水戸宰相宗翰卿
の祖母養仙院巨公駒込の亭に請し迎へられ

此日は門をひらきて家中の老若はいふに及はす
往來の男女まで叅詣をゆるし拜せしむ尼公

拜禮の間に白色の佛舍利一顆を感得せらる誠に
尼公常に三寶を尊崇し昼夜朝暮に佛

275 菩薩の聖容を瞻礼し供養する事常人に
超え殊に當尊に皈依せらる一心至誠のこゝろさし

むなしからす未曾有ふしきの感得ありかたき事
ともなり右佛舍利感得の未由を筆記し永く

280 後の世に傳へん事を懇望し給ふに付常玄その
趣を記して是を呈しぬ十日水戸宗翰卿小石川の

館へ屈請し拜せらる

十九日等覺院より御發輿ありければ府内遠

近の道俗男女板橋驛又は戸田川の邊まで

供奉し送り奉る事夥く雲霞のことし此日

285 大宮駅御止宿此宿ならひに鴻巣町吉見領の

岩殿山三所^三に御逗留開帳の中群集の諸人

意願速に成就せしとて随處悲歎の聲見聞

かまひすし六月二日岩槻慈恩寺へ入らせられ十日の

間開帳せしむ來詣の道俗巨益を蒙る輩おひ

290 たゝし常玄めしつれ候下部の内に江戸下谷村具足町

新助といふ者去月十九日發足の節より瘧疾の病に

染ミ隔日に寒熱の往來苦痛甚し祈療鍼

藥の功も驗なかりしに當月三日の夜丑ミつ頃にも

成な^なと思ふころ誰ともしらす年の程五十歳はか

295 りの出家病床へ入らせられ夢うつゝにもあらず

ありゝと告給ひけるは汝はやく袈裟の切をいた

たくへし病苦を除く事速なるへしとおしへらる

新助きゐる思ひをなし夜明て其趣を人々に語るに

つき早速に本尊御袈裟の切を少しばかり

300 授け與へければ病者頂戴せしに御告ましませし

如く其日より瘧疾の患少もなく平生に復し

けり其外近在の病女一人志願成就速なりとて

さゝけ物を備へ日参せしよし其名所をうしなふ故に

委く記しかたし十四日下総国幸手駅へ渡御當宿の

305 道俗男女開帳の懇願しきりなれば黙止かたくて

兩日御逗留有て御戸をひらき拜せしむ十九日

堅州宇都宮新宿町臺陽禪寺本堂へいらせられ

翌廿日の朝より開帳并四日申割閉帳并五日卯剋

御發輿此晚壬生町に御止宿^{領主より昼夜勤番の}并六日

310 富田宿本陣和久井藤兵衛宅御休ミ供奉の面々へ饗

應あり<sup>和久井氏本尊へ因縁有之從古
靈夢御告等の訳前段に記之</sup>八時分山麓まで渡御

駒場鷺巢兩村の老若男女ともに御迎として

朽木邊まで罷出申剋頃表坂より本堂へ還坐直に

戸帳を開き諸人に拜せしむ當二月三日此山御發輿より

315 今日まで凡一百四十二日都鄙の御逗留驛路の渡御

聊の遮障もなく貴賤の道俗老若の男女現當の

因縁を結び冥願の利益を蒙る者幾許そや挙て

かそへかたし宜成かな遊戲六道拔苦與樂の誓約

誰か是を信せさらん此御緣起を見御利益のいち

320 しるきを聞て一念信を生ずる者は必ず現當の

求願をミてん事努ゝうたかふへからず

延享改元甲子年八月

兼當山別當職東叡山等覺院

第十五世見住常玄謹誌

325 執毫 北山平洲橘 友雪

326 画工 吉田伯川藤原因定